平成２３年６月１日発行

かまぼこ

発　行　地域力推進蒲田西地区委員会
編　集　地域情報紙編集委員会
第４０号

わがまちの顔
ヨットで世界一周　天沼さんご夫妻

長い年月をかけ、ヨットで世界各国をまわられた、西蒲田一丁目にお住まいの天沼さんご夫妻を尋ね、ヨットへの熱い思いや、航海中の貴重な経験を語っていただきました。ご夫妻はともに一九四四年生まれで、現在六十七歳です。ご主人は若いころより、ヨットを操り南アメリカ大陸の最南端であるケープホーンまで行くことが夢だったそうです。ご主人が与論島で民宿を経営していた頃に奥様と知り合い、結婚したそうです。

一九八八年、四十四歳になって初めて太平洋を越え、アメリカに向け出航しました。サンフランシスコから幾つもの港に立ち寄りながら南下し、ついに憧れのケープホーンに到着しました。次は大西洋を北上です。アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル、ジョージタウン、フレンチギアナとカリブ海の幾多の小島を訪れ、ベネズエラ、コロンビアからスエズ運河を通り太平洋に戻ります。コスタリカ、ハワイを経て日本に一九九三年六月に戻りました。この第一回航海に五年を費やしました。

一九九八年、ヨーロッパからオーストラリアニュージーランドを経て北米のシアトルに渡りここで大きめのヨットに買い替えました。そこで舟の手入れをしながらのヨット生活で二年を過ごしました。次の航海は、シアトルから海岸沿いに北上して、カナダの多島海をクルージングしながらアラスカまで行き、再び海岸沿いに南下、メキシコ、グァテマラ、コスタリカ、ガラパコスの南太平洋の島々に寄港して、ニュージーランドで一年間生活し、二〇〇三年に日本に戻りました。

長い間日本を離れ、周りの方々にお世話をいただき、特にご両親には迷惑をかけ、また我が儘を許していただき、深く感謝しておられました。翌年、二〇〇四年にご主人が病に倒れ、ヨットを手放しました。

「航海中の夜間は四時間おきに交代し、コックピットで張り番をしました。当時は六文義で天測し、無線で気象情報をキャッチ、現在自分たちの船の位置を確認し天候の急変などに対応します。気象の知識が必須の条件でした。時間の余裕のある時は、立ち寄る国々の国旗を刺繍し、着る物の洗濯や繕い、また読書の時間に当てました。

ヨットで海上を駆ける最高の楽しみは夜、風の無い海で見る満天の星空がすばらしく、また暗い海の中、夜光虫が飛沫のなかでキラキラと光っている様子は見事な光景でした。空と海の境もない海原を長年にわたり航海を続けられたことは、何者にも変えることの出来ない、貴重な体験でした。」

体調も戻られたご主人とともにヨットについての思い出話を目を輝かせ楽しそうに語ってくれました。

現在、奥様は障害を抱えている方々のためボランティアの団体を立ち上げ、自宅と蓮沼中学でパソコンの先生として活動されています。

義雄さん・明美さんご夫妻

（取材　勝俣、石渡委員）

投稿
多摩川土手を走る路線バス

昭和十五年～十六年、私が小学校に入学前なのか、入学後か記憶が定かではありませんが、多摩川土手の上を走っていた路線バスが土手下の河川敷に転落して、けが人が出るという事故がありました。祖父に、手を引かれ、事故現場まで見に行きました。現場は古川薬師さんの近くだったような気がします。バスが車輪を上にして仰向けに転がっていました。

確かなことを知りたくて、地元にお住まいの年配の方々、何人かにお聞きしました。

○安方町（多摩川一丁目）で生まれ育ったＩさん（八十二歳）

「事故の話は聞いたことがある。多摩堤通りを矢口方向から来て、矢口東小学校の信号を右折し、二つ目の四つ角を左折、蒲田商店街の中央付近、現在の亀屋家具店あたりに終点があった。バスが終点に着くと、乗客を降ろし運転手や職員、バスを待っていたお客さんがバスに取り付きいっせいに押して、バスの向きを百八十度回転させる。仕掛けは、前画のタイヤが収まる大きさの鉄板でできた円盤のうえに駐車させ、円盤の下のローラーで回転させたらしい。道幅が狭くＵターンする広さがないための工夫だった。戦時中も空襲で町が壊滅するまで木炭バスが走っていたと思う。」

○原町（多摩川二丁目）多摩川のごく近くで生まれ育ったＯさん（八十七歳）

「戦争中、蒲田から来たバスが土手の上を走り、東八幡神社前で土手から降り矢口方向に、走っていた。近くに停留所はなくバスを利用したこともなかった。事故は覚えていない。また、いつ廃止になったのかも分からない。」

○古市町（矢口三丁目）で生まれたＹさん（八十七歳）

「東八幡の近くに停留所があった。十寄神社先の交差点を右折して多摩堤通りを蒲田へ向かった。バスが転落事故を起こしたことは覚えているが、何時だったかは覚えていない。戦争中にいつの間にか廃止になった。」

七十年以上も前の話なので、東急バスや東急電鉄に電話で問い合わせたが、資料がないので分からないと言われました。

このバスについて詳しくご存知の方は居りませんか？

投稿者　にゃんぱぱ

東日本大震災で被災された方々に、心よりお見舞いを申し上げます。

編集後記

以前取り上げさせていただいた記事のその後を、いくつかご紹介させていただきます。

第五号のわがまちの顔でご紹介した漫画家の石井いさみさん。昨年十一月頃から、石井さんの絵が、蒲田西口すずらん通り商店街のお店のシャッターに描かれています。現在、八店舗ですが、今年新たに四店舗増える予定とのことです。商店街の活性化に貢献できるならと、石井さんが無償で提供してくださっているそうです。とても素敵な絵なので、お時間があったら、ぜひご覧ください。ただ、お店が閉まっている時にしか見ることができないのが残念です。

第三十八号の特集でご紹介した小学生ドッジボールクラブの道塚ドリームウイングスと女塚ゴッチャンドッジボールクラブが、今年三月に大田区青少年表彰のスポーツ部門で表彰されました。今後の更なる活躍が楽しみです。

第三十九号の四面でご紹介した日本電子工学院専門学校の桜。二月に植えられ、三月の終わりからきれいな花をつけて歩行者の目を楽しませてくれました。学校の中庭の花壇には季節の花々が植えられ、憩いの場所になっています。

今回の四面は、投稿記事を掲載させていただきました。多摩川の狭い土手の上をバスが走っていたということに驚きました。どなたか、このバスのことをご存知の方がいらっしゃいましたら、事務局までお知らせください。投稿者の方にお知らせしたいと思います。

情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五

蒲田西特別出張所管内

人口	男	３０，０１７人
	女	２７，４０２人
	計	５７，４１９人
世帯		３１，４０２世帯

平成２３年５月１日現在

女優　田中絹代

女優田中絹代は一生結婚しなかったと言っているが、昭和二年、十八歳で清水宏監督と結婚している。媒酌人は松竹蒲田撮影所の城戸所長で、蒲田町女塚四百四十九番地に新婚家庭をもった。しかし結婚生活は二年で破局し、撮影所近くの借家にもどった。四年後の昭和六年には矢口町三百二十三番地に家を購入し、近くにあった慶応大学の合宿所やグラウンドに足繁く通っている姿を目撃されていた。お目当ては六大学野球のスター選手、水原茂選手（後に読売巨人軍入団）であった。

さて二年間の愛の巣であった蒲田町女塚四百四十九番地であるが、現在の地図ではどのあたりであろうか。昭和八年の蒲田区の地図で探しあてた。女塚四百四十九番地は特定出来なかったが、四百四十四番地まで見つけることが出来た。当時の女塚は呑川沿いにJR線を越え、現在の蒲田一丁目一番から四番あたりまで、蒲田駅ホームの北端をかすめて、蒲田東地区に食い込んでいたのだ。今の女塚の地図をいくら探しても探し出すことが出来ないわけだ。

田中絹代は生涯に二百五十を越す作品に出演しているが、過去を振り返って語る場合、決って次の五つの作品を挙げている。「恥ずかしい夢」「伊豆の踊り子」「お琴と佐助」「浪花女」「西鶴一代女」。数多く作品を演じた中で、特に心の内に深く刻み込まれるものがあったのであろう。その中から三作品を取り上げてみた。

恥ずかしい夢（昭和二年）

初めての主役だった。世間知らずの可愛い芸者役がキャラクターにはまり出世作となった。監督は五所平之助、後に松竹映画の大プロデューサーとなった城戸四郎所長は、平凡な庶民生活の中に人生の哀愁を見ようとした、いわゆる城戸イズムを強力に主張した。蒲田調（のちに大船調）は田中絹代にとって幸運な出会いとなった。

お琴と佐助（昭和十年）

谷崎潤一郎の「春琴抄」を島津保次郎が脚色、監督した。盲目の三味線奏者・春琴に丁稚の佐助が献身的に仕える耽美的作品。佐助は高田浩吉。春琴の性格は、驕慢で征服欲が強く、気位が高く我が儘で自己中心的、どれをとっても田中絹代そのままであり、地でいったと言えばそれまでだが、見事に演じきり注目された作品となった。

西鶴一代女（昭和二十七年）

西鶴一代女

原作は古典・西鶴の「好色一代女」を脚色したもので、御所に宮仕えした女が、下級武士との恋に破れ、女ゆえの悲劇に巻き込まれて転々と淪落の底に沈んで行く。老いさらばえて私娼に身を落とし、町行く男の袖をひく。後半、老醜をさらけだした下級売春婦のくだりとなると、溝口演出もさることながら、田中絹代は不気味なほどの女体の末路を演じた。溝口健二の最高傑作であり、田中絹代が一世一代の名演技を見せ、ベネチア映画祭監督賞を受賞した。

絹代の生い立ち

田中絹代は、明治四十二年二月二十九日四男四女の末娘として山口県下関市に生まれた。母、ヤスの実家小林家は手広く造船業を営む資産家であったが、日露戦争の終局後、急速に押し寄せた不景気に対応できず、倒産した。絹代の父、粂吉の呉服屋も小林家の倒産に巻き込まれ共倒れとなり、粂吉も明治四十四年の夏、脳卒中で亡くなった。一家の主を失ったとき、田中家は十六歳の長男慶介をかしらに七人の子供たちがいた。四年後、絹代六歳のときである。長男慶介が徴兵をのがれるために逃亡し、周囲から執拗な非難の声をかけられ、耐えかねてか翌年には次男鼎（かなえ）までが家出をしてしまった。

大正六年の夏、母ヤスは窮地に追い込まれたという悲痛な手紙を兄安太郎宛にだした。ヤスの実兄つまり絹代の伯父も事業に失敗し、大阪天王寺駅裏の長屋に妻と二人でほそぼそと生活していた。とにかく大阪まで来いという返事に絹代一家は、夜逃げ同様に大阪を目指した。天王寺駅裏に住まうことになった母ヤスは五人の子供を抱え、なりふりかまわず、内職に励んだ。

絹代は幼いころから芸事として琵琶を習っていた。天王寺に移ってからも、宮崎錦城に弟子入りし筑前琵琶を習い、その宮崎錦城が「琵琶少女歌劇」を組織し、絹代も、千日前楽天地の舞台に上がった。当然学校などに行っているヒマはなく、四年生でやめてしまっている。幼い絹代の舞台は、一家にとって頼りになる収入源であった。

楽天地には活動写真の小屋があり、絹代は、栗島すみ子の「虞美人草」や「船頭小唄」などを見て、活動写真の虜になった。「活動写真の女優になりたい」と、絹代は母に打ち明けた。堅い家に育ち、世間の荒波にもまれたことのないヤスだったが、いまは、生きて食べて行く辛さが、骨身にしみ透っていた。伯父安太郎に相談すると活動好きの伯父は諸手を挙げ賛成してくれた。松竹大阪支店に勤務の兄、晴男から支店長、井上重正氏に話を通し、松竹キネマ合名社の社長白井信太郎に面接が適った。大正十三年八月三日、ついに絹代は、天王寺駅裏の小路の奥から這い出した。

伊豆の踊り子

下加茂撮影所

松竹下加茂撮影所は大正十二年の関東大震災で蒲田撮影所が壊滅したため、急遽、左京区の鴨川のほとりにトタン張りの仮設ステージを建て蒲田組が大挙して移動してきた。

撮影所の近くに借りた二階建ての貸家は、撮影所から鴨川を隔てた目と鼻の対岸にあった。撮影所には一跨ぎの距離だったが、橋を渡ると遠回りになり、二十分はかかる。絹代は、裾をからげ鴨川を渡った。それなら二、三分の距離だ。裾をからげ、腿まで現し渡ってくる若い女優にスタジオの裏の土手から歓声が上がった。監督に昇進したばかりの清水宏の「村の牧場」に出演することになる。やはり絹代は大部屋の中では目立つ存在であった。復興になり蒲田からの移設組が帰ると決ったとき、清水宏から、一緒に東京へ行かないかと言われた。「村の牧場」以来「小さき旅芸人」「激動の叫び」とつづけて清水作品に出ていた絹代は、清水宏たちの帰ったあとの孤立が恐かった。母に相談すると、意外にも即座に東京行きに賛成した。

蒲田撮影所

蒲田駅に着き、西口に出ると、目の前に「クララ」という喫茶店があった。大正十四年の初夏、後ろに若い娘を従えた清水宏が入ってきた。「こんど下加茂から蒲田へ来た田中絹代さんだ」

若い娘は浴衣を着て、三尺帯を結び、下駄をはいていた。マダムは、清水が、田舎から知り合いの娘でも連れてきたのかと思った。（小説・田中絹代より）

絹代の所属は大部屋で、下加茂の倍の人数がいた。階級制度は厳しく、「幹部」に「大部屋」が気軽に口を利くことは出来ない。栗島すみ子や川田芳子らが、部屋からセット入りするときは、大部屋女優は道を避け腰を屈めてやり過ごした。

翌大正十五年までに十二本の作品に出演したが、鳴かず飛ばずであった。昭和二年「真珠婦人」の台本を渡された。栗島すみ子の娘という大役であった。感激の最中に信じられないことが起きた。絹代に主役の話が舞い込んだのだ。二十五歳の新人監督、五所平之助の「恥ずかしい夢」は「真珠婦人」より前にクランクインした。

絹代御殿

昭和十一年、蒲田撮影所は大船に移転。絹代は鎌倉でも一等地、鎌倉山旭ヶ丘に五百坪の土地を手に入れ、絹代御殿を建てた。八十坪の母屋、離れに母と四人の兄弟とともに住む。

戦後の昭和二十四年、旭ヶ丘から五百メートルばかり離れた三万坪の敷地と、二棟の日本家屋を手に入れ移り住む。以前の絹代御殿とは比べものにならない豪勢な御殿だ。

昭和五十二年三月二十一日、四十数年間、絹代の付き人として寄り添い苦楽をともにしてきた仲磨新吉にみとられて永眠。病名は脳腫瘍、六十七歳。

愛染かつら

参考文献

進藤兼人「小説田中絹代」

古川薫　「花も嵐も」

（取材　都築委員）